

白藍塾オリジナル

2010入試小論文分析&解答のヒント

2010年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・文学部

課題文は、『日本語が亡びるとき』という本についての著者インタビュー。著者の言う「国語」という概念が少しわかりにくいだが、難しい文章ではない。わかりやすくまとめると、こういうことだ。

「現地で使われているだけの言語は、まだ国語と呼べるものではなく、普遍語（今では、英語に代表される）を翻訳するという作業を通じて磨かれ、人間の叡智を刻む機能を持ってこそ国語になる。日本では、福澤諭吉などが西洋の普遍語をよく読み、それを翻訳して国語を作っていた。ところが、現在、世界的に意味のある文章は英語で書かれ、日本語が娯楽でしかなくなっている。このままでは、日本語は現地語になってしまい、国語は亡びてしまう。日本語が国語として存在し続けるためには、日本人は古典を読む必要がある。これから、多くの人々が英語によって世界を理解していくが、西洋語とは異なる日本語の書き言葉によって世界を理解するのは意味があることだ。日本語という国語を守る必要がある」

この文章を読んで、設問Ⅰでは、「普遍語」「国語」「現地語」の違いを説明することが求められている。「普遍語」が英語などの世界全体で通用する言語、「現地語」というのはそれぞれの現地で通用している言語、「国語」というのは、現地語が普遍語の翻訳を通じて磨かれたものをいう。そして、とりわけ書き言葉として、娯楽ではなく、その国家をなす人々の叡智が刻まれる言語のこととまとめられる。それを制限字数内にまとめればよい。

設問Ⅱは、「英語を日本の公用語とする」という意見について論じることが求められている。とはいえ、「英語を公用語としたほうが経済的、あるいは世界との表面的なコミュニケーションには好ましい状況の中、日本語の書き言葉を重視して、西洋語とは異なる国語を守るべき

である」という著者の意見を視野に入れて論じるのが好ましい。

「英語を公用語とするべきではない」という方向からは、「英語と異なる思考法を基盤にする日本語が公用語として存在することにより、英語圏の人とは異なる思考法で世界に参加できる。また、外国の人々も日本語を学ぶことで、西洋とは異なる価値観を知らせることができる」「日本語を公用語とすることによって、日本の国語を守ることができ、日本人の価値観や昔から刻まれてきた叡智を未来につなぐことができる。英語を公用語にすると、歴史の流れが途絶え、日本人としてのアイデンティティが失われ、世界の流れに追随するだけになる」などの論が考えられる。

逆に、「英語を公用語とするべきだ」という方向からは、「英語で世界の普遍が決定され、それを中心に文化が深まる時代において、日本語という現地語を使い続けるとむしろ叡智が生み出されなくなる。英語を公用語にすることによって、世界の人々と交流し、そのなかで新しい叡智を築くことができる」などの意見が可能だ。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)
<http://www.hakuranjuku.co.jp>